



Title	椅子シリーズ(Ⅰ)
Author(s)	妹尾, 衣子; 村上, 太佳子; 中, 淳子 他
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 76-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52608
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

椅子シリーズNo.1

椅子について

妹 尾 衣 子

1. 椅子は多様になった

椅子は社会の産物である。歴史の中で、夥しい数の椅子類が、時には神や権力の象徴として、時には実用の為に姿を現わした。近代になってからは、椅子というイメージをもとに、すわれない椅子や椅子のようなものが表現され、デザインとアートの境界も重層的になった。

現代の椅子の多様さの特徴は、今新しく作られている椅子と同時に、時代を離れ、持主を失ったはずの椅子類が、単なる骨董収集の為ではなく、今だに多くの人々に使い続けられ、生産されているという、層の厚さにある。

2. 寡黙な椅子は可能か

今、椅子はもう出尽くしたようにも思える。出口は混沌として見えない。見えないから、ますます、おしゃべりな椅子が氾濫する。

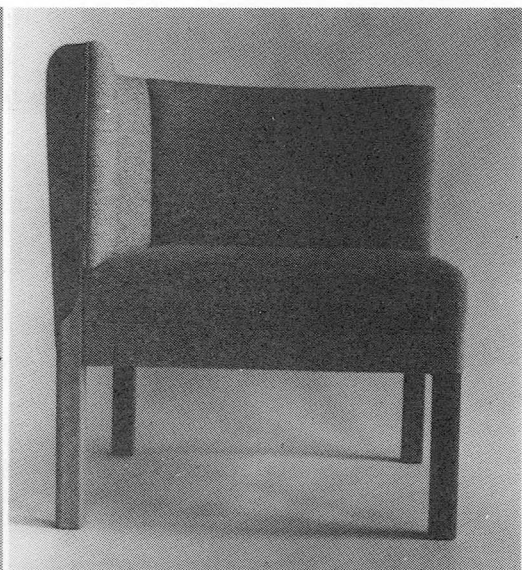
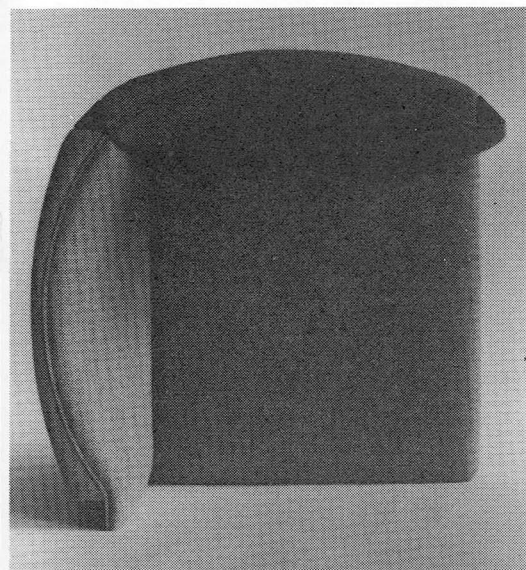
私は、一人でおしゃべりしない椅子を作りたいと考えている。没个性的という意味ではない。人がすわって初めて生き生きするような、もう何年も持主と共にあるような、そんな存在感の椅子は作れないものかと。

写真は、セクショナル・チェアーで、1脚では、自在なすわり方、2脚ではラブチェアーに、長くしてベッドにと、持主任せの使用が可能です。材料はナラ材・裂地張り。

製作年月日 1983年3月

販売予定 1983年11月

制作所 二葉工業株式会社

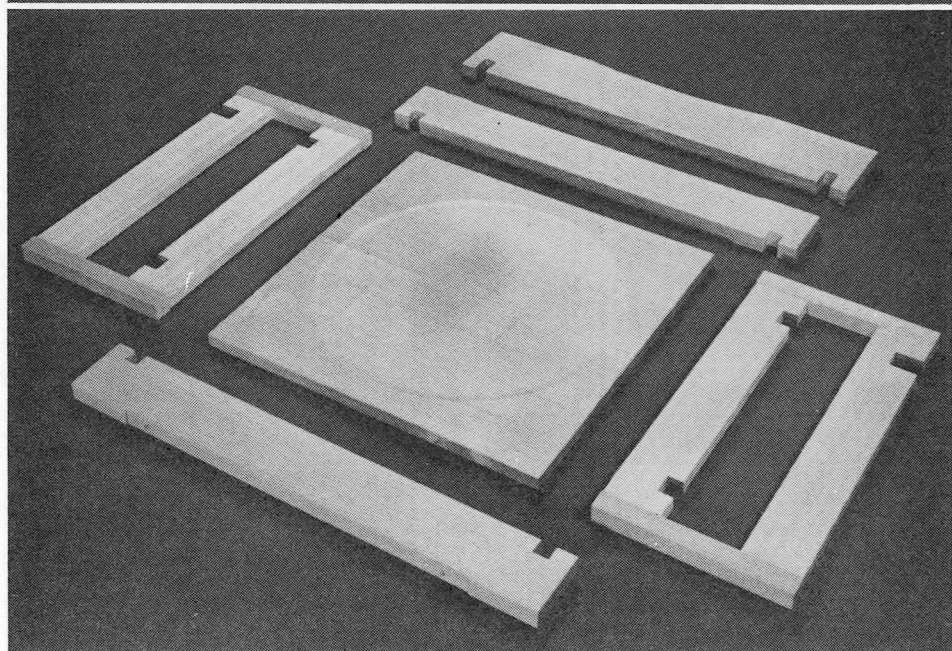
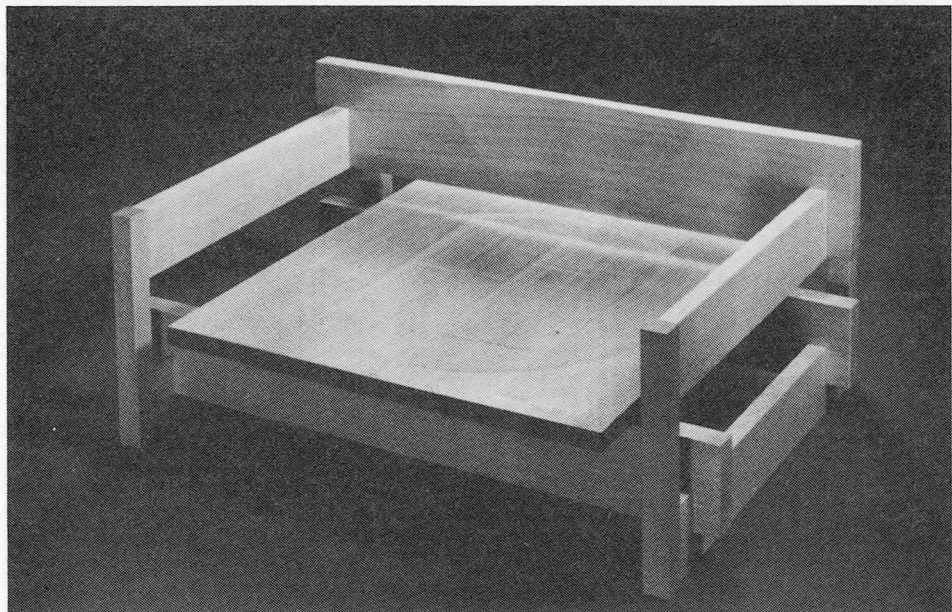


椅子シリーズNo.2

低座椅子（日本建築空間への提案）

村 上 太佳子

日本の伝統空間の持つ、高く洗練された質をもう一度現代の生活の中に生かすために、日本人の持つ感性を主題として、その感性が日本の伝統空間と、そこに表れる道具のあり方を問い直すことによって、日本の空間の中での現代人の座すための道具としての椅子、低い座を持った椅子を考えてみました。日本の伝統空間が持つ高い質と同質の感性を持つものであること、空間と人の要求にこたえて、表れたり、消えたりできるものであること、そして、人が座すことに十分に耐えうる本質をもつもの、そんなものを求めながら、その道具を使うことによってやすらぎを得られるものを目ざして、低さへ向って設計してみました。日本の空間に特有の、外と内とをさわやかに流れる空気が、この低座椅子を使うことによって感じられればと思います。

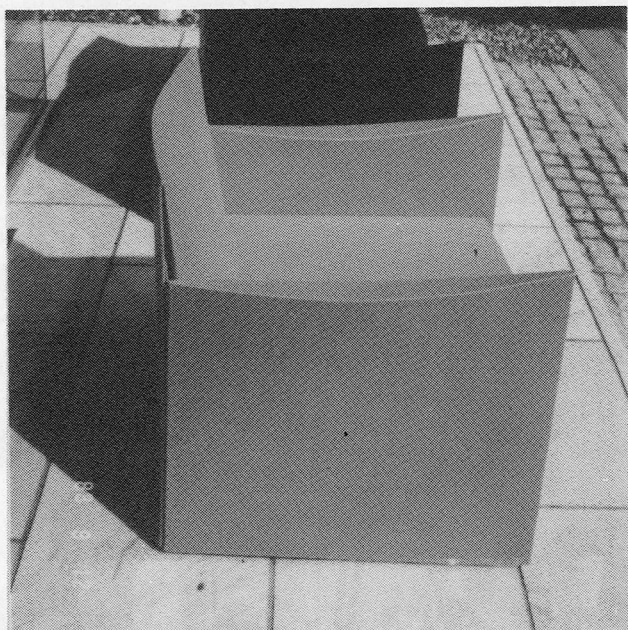


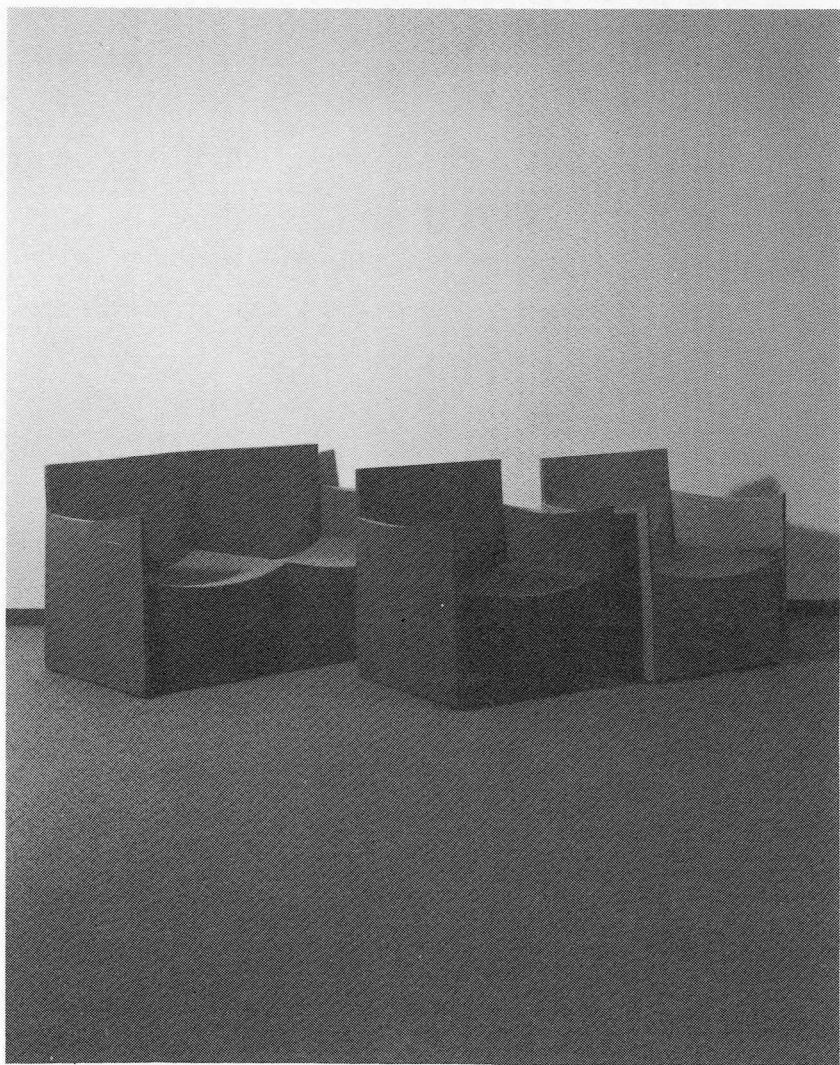
椅子シリーズNo.3

ペーパーチェア

中 村 隆 一

3 ㎖と 5 ㎖の厚紙に耐水紙をオーバーレイし、折り曲げ加工した後、プラスチックのボルトナットで4 箇所を固定して（接着剤“ボンド”併用）組立てたものである。主材が1,100㎖×800㎖の厚紙 5 枚の材料であるため、材料費は極めて安価である。（≒4,000円）これは試作品であるが、現在トムソン型により手加工の手間を省く工程を考慮中。





椅子シリーズNo.4

「子供のための二つの椅子」

中 淳 子

子供がものを食べたり遊んだりするときどきに、自分の椅子として愛着のもてるものを、ということで計画しました。

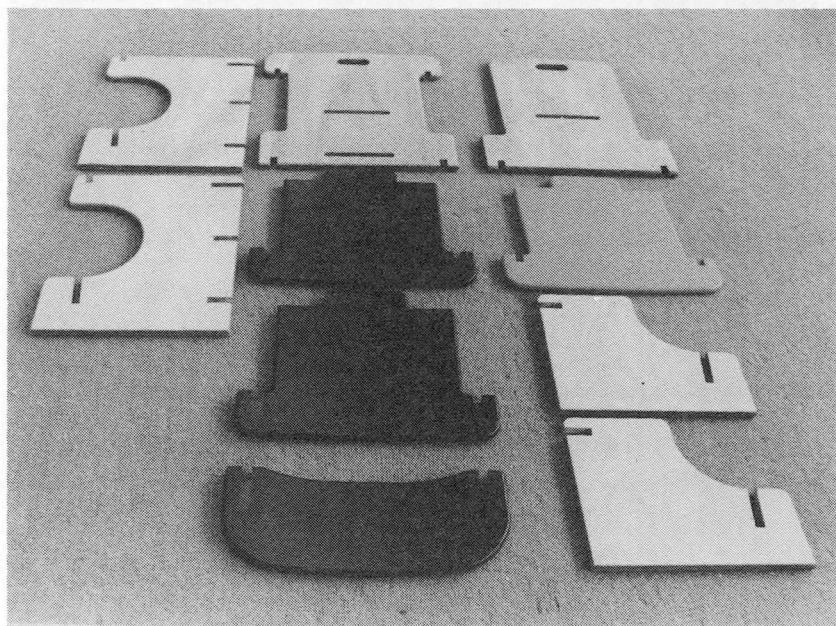
単なるパネル（シナベニヤ15mm）だけの組み合わせによるので、使い方に応じて天板や下の物置台をはめたりはずしたりもでき、また年齢は0歳から6～7歳、或いはそれ以上の子供でも使用できます。

もちろん、しばらく使わないというようなときには、簡単にノックダウンできるので、現代的条件である省スペースということにも適っていると思います。

1983. 5 (株GL制作)



子供のための二つの椅子



椅子シリーズNo.5

ウレタンフォームによるインサートモールド椅子

野 口 茂

椅子のデザインは、新らしい材料や技術の開発によって、飛躍的な展開を示す場合が多い。

写真の椅子は、1961年米国のジョン・ホローズにより製法が考案され、東洋ゴム工業（株）がその特許を得て、商品化したものである。（特公昭36—8385）その特徴は、1950年代に開発されたF R Pを素材としたシェル構造の椅子に対し、発泡ウレタンを用い適度の弾性を持つ三次曲面の形成と、強度に要する炭素鋼管の内蔵を同時に一体成形し、単一工程で量産し得ることである。材質的には通気・断熱・保温等の性能に優れ、かつ比重が小さく硬度変化が可能等の特性が多い。

しかしその生産については本邦で最初の試みであるため、物性や技術上の問題点が多く、デザインは先づそれらの厳しい制約を満足しつつ、椅子としての諸条件を具備することであった。

製品は同社より「ソフランチェアー」として、昭和38年頃より市販されその後シリーズ商品として数種量産されたが、生産総数の詳しい記録は不明である。

椅子の支持面が人体曲面にそい弾性を持つことは、デザイナーとして長年の願望であった。その要望が一応結実し得たのは、技術者の多大な協力によるものであった。（全家連グランプリ受賞）

